松尾琴美は勇者である

時　司

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神世紀２７０年、福岡の勇者が救った多くの中にいた一人の神官。彼女の子孫である松尾琴美はある日、母親から勇者に選ばれたことを伝えられる。

動き出した運命。愛媛県今治市、来島海峡大橋をかけ橋に３人の勇者は壁の外に赴く。

これより語られるは、華やかに咲く花々の物語りではない。悲哀のうちに咲く影の勇者達の物語りである。

目次

松尾琴美の章
1話　暁　1
2話　払暁　10
3話　明け方　22
4話　薄明　32
5話　黎明　41
6話　東雲　52
7話　曙　60
8話　彼誰時（かれはたれとき）　70
大赦愛媛支部記録
外伝1話　大赦愛媛支部記録　一、　80
外伝2話　大赦愛媛支部記録　二、　83
外伝3話　大赦愛媛支部記録　三、　86
外伝4話　大赦愛媛支部記録　四、　89
外伝5話　大赦愛媛支部記録　五、　92
外伝最終話　大赦愛媛支部記録　六、　95

松尾琴美の章

1話　暁

　梅が咲き誇る2月中旬、私は自宅の座敷で母親と正対していた。朝食を済ませたときに大事な話がある。とだけ伝えられていた。学校では別に問題を起こしたわけでもないし修行をサボったわけでもない、

「お母様、今日はいかがなされましたか。」

　恐る恐る様子をうかがう。彼女はいつも厳格であるが今日はより一層である。まるで心のそこまで見透かされているような気分だ。

「あなたは勇者に選ばれました。」

　一瞬、何を言われたのかがわからなかった。考えがまとまらないまま口を開いた。

「あの…勇者というのはあの勇者様のことでしょうか。」

「そうです。あなたも修行する中で乃木家のことは知っていると思います。乃木家のご先祖様である乃木様、高嶋様、土井様、伊予島様と同じ勇者としてあなたが選ばれたのです。」

　勇者が何をしたかは詳しくはわからないが、神樹様を危機から守り抜いた英雄である

と聞いたことがある。ということはまた神樹様に危機が迫っているということだろうか。
「私は何をすればよいのですか。」
「大赦本部からの指示であなたは愛媛県のへ転校することとなりました。そこでお役目に就くことになっています。」
「お役目…ですか。」
「不安もあるでしょうがこれは神樹様のお導きでもあるのです。あなたはそれを果たす責務がある。」
「わかっています。でも実感が沸かなくて…。」
「あなたにこの話を伝える時が来たのですね。」
「話…ですか。」
「この松尾家には勇者にまつわる伝承が語り継がれています。」
　そう言って母親は座敷に飾られている折れた薙刀へと目を向けた。昔あの薙刀を傷つけそうになってかなりきつく怒られたのを覚えている。
「あの薙刀は野田という勇者が使っていたものだと伝えられています。」
「野田…、勇者様は乃木様、高嶋様、土井様、伊予島様だけではないのですか?」
「四国で神樹様を守った勇者様は4名です。しかしそれ以外にも勇者がいたのです。松

尾家は西暦の時代は福岡という地で大社に勤めていたと伝わっています。そしてこの四国へと流れ着く際、勇者に助けられた。と。」

勇者様が四国以外にいたということだけでも驚きなのにご先祖様は勇者に仕えていた？

「あなたが勇者に選ばれたというのも何かの因縁あってのことかもしれません。勇者となる以上は神樹様のために戦いなさい。」

「わかりました。」

あれから数週間後、私は予州中学校の職員室にいた。

「あなたが松尾琴美（まつおことみ）さんね。私は青野、あなたたち勇者担当の職員です。」

「よろしくお願いします。」

「早速だけれどもついてきなさい。」

青野と名乗った女性の教師は背が高く、無表情のまま私を迎え入れた。今は春休み期間で職員室にも廊下にも人通りがほとんどない。

彼女はすたすたと歩いていき、入り口の開いた教室の前で止まり、私に先に入るように促した。教室のカーテンは廊下側も校庭側も閉ざされ、蛍光灯が室内を照らしていた。私と同じぐらいに見える少女2人が用意された席についている。2人とも別々の制服を着ているところを見るに私と同じように勇者として転校してきたのだろう。私

が席に着くと先生は教卓に準備しておいたパソコンを立ち上げた。黒板にセットされたスクリーンに画面が映る。
「今からあなた達のお役目について説明します。」
　そういうと先生はパソコンを操作した。スクリーンに映像が映し出される。
　大地は真っ赤に染まりマグマのような物が所々で流れ、空は深夜の曇り空のように漆黒に包まれていた。さらに何かが空中でうごめいている…。
　何の映像だ。映画なのか？わざわざ勇者になる少女を集めて映画を見せるというのはどういうことなのだろうか。そんなことを考えていると先生がおもむろに口を開いた。
「今映し出されている映像はこの世界の本当の姿です。」
　私を含む3人は先生のほうを向いて固まっていた。
（何を急にいいだすの？この人は。）
「四国を囲む壁があるでしょう。この映像はそれの外側の映像です。」
「壁の外？壁の向こう側にはこんな景色は広がっていないと思うのですが。」
　私の2つとなりに座っている長髪の少女が疑問の声を上げた。
「それに、壁の外はウイルスが蔓延してるとは習ったけど、ウイルスって大地とか空とかをあんなふうに変化させるの？」

「加えて、あのうごめいていた何かは何なんですか。」
私と私の隣に座っていた短髪の少女も質問に加わる。
「あなた達3人の質問は至極まっとうな物です。…今から話すことは他言しないようにしてください。」
そういうと先生は世界がなぜこの映像のようになったのかを話し始めた。
西暦の時代、人類が致死性のウイルスで滅亡しかけてこの壁の内側。すなわち神樹様に守られるようになった。というのは偽りの歴史であり、実際は『バーテックス』と呼ばれる化け物が出現して神樹様の結界内に追い詰められたことが本当の歴史である。と。
先生が話し終わってからしばし沈黙が教室全体を支配した。
「私たちが勇者として集められたということは神樹様が危ないということなのですか？」
長髪の少女が先生に質問した。
「はい、映像にあったようなバーテックスが去年の暮れほどから出現するようになりました。バーテックスは西暦の奉火祭という儀式以降ほとんど観測されていませんでした。しかしそれが出現したということは異常事態です。そして神樹様のご神託もあり、あなた達が集められました。」

「じゃああの化け物と戦うの？怖いのはいやだなぁ。」
　今度は短髪の少女が声を上げた。こちらは質問というよりは感想である。
「敵は、バーテックスは攻めてくるんですか？」
「いいえ、まだその兆候は現れていません。しかし攻め込まれた時の対策を事前に打っておかなければなりません。」
「対策…？」
　先生は教卓に置いてあったアタッシュケースを開けて中からスマートフォンを取り出し、私たちの前に1台づつ置いた。
「このスマートフォンの中には勇者システムと呼ばれる唯一人類がバーテックスに対抗できるシステムが入っています。しかし誰もが使えるわけではなく、神樹様に選ばれた数少ない人類にしか扱うことができないのです。西暦の時代にも勇者様はこのシステムを使って神樹様、そして人類をお守りになりました。それを改良したものをインストールしています。」
「攻めてこないのに戦う必要があるのですか？」
　長髪の少女が再び問いを投げかける。
「直接神樹様を守るということではありません。あなた方3名にはこの改良型勇者システムの実践データ収集と壁の外の調査を行ってもらうだけです。」

「実験のための捨て駒ということですか。」
「そう思うのは松尾さん。あなたの勝手でしょう。私は神樹様のお役に立てること自体が名誉なことであると思いますがね。特に、神官の家系であるあなたならば特に。」
私は頬の裏を噛んだ。確かに母親からも、儀式の作法を教えてくれていた神官の大人たちも神樹様のためにと私へ教え込んでいた。私もそうあるべきだと思っていた。でもあんな火の海に飛び込むことが勇者であると言われるのは気に食わなかった。
「以上でよろしいですか。システムの説明もスマートフォンに同封されています。それを読む時間などもありますでしょうし、荷物の確認もあるでしょう。明日の9時、この教室集合です。担当の職員が宿舎に送り届けるので来るまでこの教室で待機しておきなさい。」
そう言い残すと先生はパソコンの電源を切って教室を出ていった。
「あの先生、なんかかったいなぁ。そう思わない？松尾さん。だっけ？」
唐突に短髪の少女がつぶやいた。急に名前を呼ばれて動揺した。
「…え、ええ。」
「やっぱそうだよな！なんか氷の女、みたいな。」
「それより、あなた…誰？」
「私か、名乗ってなかったね。私はヤギイユキだ。八本の木に伊予中の伊に雪で八木伊

雪、よろしくな！そういえば松尾の下の名前は？」
　八木はそう自己紹介をした。かなり快活な印象ですでに圧倒されてる。なんというか、緊張感に欠ける…というか…。
「私は松尾琴美、琴に美しいで琴美。」
「琴美さんですか。いい名前ですね。私はスダアヤハ、彩りに葉っぱと書いて彩葉です。よろしくおねがいしますね。」
　長髪の少女は落ち着いた様子で自己紹介をした。
　ちょうどその時教室の扉が開いた。一瞬さっきの陰口を先生に聞かれたと思って体が跳ねそうになったがそこにいたのは神官服を着た男性だった。
「大赦の者です。勇者様方をお迎えに参りました。どうぞこちらへ。」
　私たちは案内されるがまま車に乗り込んだ。
「宿舎へお送りいたします。3名様は同じ宿舎で暮らしていただき、親睦を深めていただくようになっております。」
　しばらく走った後。運転手の男はある建物の前で車を止め、鍵を渡して言った。
　3人はお礼を言って車を降りた。
「2人とも改めてよろしくね。」
　八木は右手をさしだした。しかし私と須田はその手を握ることはしなかった。

神世紀２７０年３月。これは可憐に日の下で咲く花々の物語りではない。悲哀のうちに咲く影の勇者達の物語りである。

2話　払暁

次の日、私たちは支給された予州中の制服姿あの教室に集合していた。
青野先生が9時ちょうどに教室に入ってきた。
「須田さん。号令をお願いします。」
「はい。全員起立、礼。神樹様に、拝。」
号令にあわせてまずは先生に礼。次に黒板の左上にある神棚に向けて手を合わせて一礼する。
「本日より勇者としての活動が本格的に始まります。勇者システム添付の説明には目を通した前提で話を進めていきます。何か、質問がある人はいますか。」
そういうと須田が真っ先に手をあげる。
「私たちが使う武器は刀、手甲、旋刃盤、ボウガン、鎌とありますが、鎌だけ採用理由が明記されてないのはなぜですか?」
「ああ、鎌が採用されている理由は上里様からの直接のご指示です。」
「上里様?」
「そうです。大赦の中でも格式の高い巫女様の一人です。」

上里家がなぜわざわざ武器の指定を？上里家といえば乃木家に並ぶ最上位の格式を持ってはいるが、何か考えあってのことであろうか。

「わかりました。」

須田も納得したように引き下がった。

先生は教卓に設置してあったパソコンを操作し、昨日と同じようにスクリーンに画面を映し出した。今日は映像ではなく何枚かのスライドが表示される。

「あなたたちは今後壁の内側と外側を行き来するようになりますが、西暦の時代に使用されていた樹海化システムを応用して来島大橋を架け橋として使用します。あなたたち3人の勇者の拠点は来島大橋海峡記念館、訓練場はアクティはしはまです。」

その後システムの確認を何点か行った。

「あなたたち3人は1週間後、壁の外でシステムのテストを行ってもらいます。」

話の最後、他とは違う声色で言った。座っていた八木が唐突に立ち上がる。

「私たち、ここに来たの昨日ですよ！それなのにもう壁の外に出るんですか！」

「昨日言ったでしょう、事態は急を急ぎます。勇者でない人が壁の外に出て観測を続けるには限界が来ています。先日も一人の観測官が殉職しました。だからあなた達がいる。」

先生は冷たく言い放った。

予州中学から徒歩数分、場所をアクティはしはまに移した。
元はゴルフコースだったのだろうか、ところどろこに砂のたまったくぼみが残っている。
「今から演習を始めます。各自手順通りにアプリの機能をアンロックしなさい。」
先生は離れた場所から拡声器を使って指示を出している。3人はそれぞれのスマホを取り出し、自分の正面に構えた。
「天地にきゆらかすはさゆらかす――。」
アプリに表示された祝詞を読み上げた。スマホの画面が祝詞の文から植物を模したマークへと変化し、身体が光に包まれた。体中の血がたぎるような感覚を覚え、体の底から力がみなぎる。数秒で光が解け、視界が戻ってくると3人の少女は映画のヒーローのような姿に変身していた。
「うぉっ、なにこれ。これが説明にあった勇者装束ってやつか！」
八木ははしゃいでジャンプした。すると八木の身体は宙を舞った。身体能力が格段に向上しているということか。
須田と私の装束も見てみるに色や形に差はなく、統一されている。頭にはバイザーが装備されていて外から顔は見えないが、内側からは視界に影響はない。顔を守るための装備ということだろうか。

「今から実際にシステムを動かして確認を行います。表示された5つの武器から好きなものを呼び出してみてください。」

先生の指示と同時に視界に5つの武器が表示された。拡張現実システム…といったところだろうか。ひとまず私は刀を使ってみようと思った。その瞬間、手に何かの重みを感じる。見ると私の右手には刀が握られていた。

(なるほど…この補助システムは考えるだけで武器を呼び出せるのか。ならば!)

「思った通りだ…。」

次は鎌を呼び出そうと思った。すると考えた通りに刀は消え、鎌が呼び出される。

1日日暮れまで武器に慣れるための演習だった。次の日も、その次の日も演習が続いた。

身のこなしと武器になれるには少々手間取った。

1週間後、私たちは来島大橋記念館に集合していた。今はこの一帯を大赦が管理していて一般の人は入れないようになっている。

記念館には数人の大赦職員と青野先生、そして私たちの姿だけがあった。

「今日は初めて壁の外に出ます。私個人は早すぎるとは感じていますが事態は待ってくれません。今回の目的は壁の外の土を持ち帰ることと壁外での装束のデータをとることです。」

「外の土を持ち帰るって、どうやるのさ。」
「今から説明します。焦らないでください八木さん。」
　大赦職員から５００ｍｌペットボトルぐらいの筒を渡された。
「それは羅摩（かがみ）と呼ばれる耐熱性の容器でございます。壁の外の土でも採集可能となっております。どうかご健闘をお祈り致します。」
　冷徹な先生に対して職員の方は異常に腰が低く、あまりいい気にならない。
「土を回収する場所に指定はありますか。」
　須田は一切の不満を外に出さずに質問をした。
「いいえ、今回は壁の外ならどこで採取しても構いません。」
「わかりました。」
「壁のの内側と外側を行き来できるのは来島海峡大橋だけです。生きて帰りなさい。」
「生きて帰れ…ねぇ？」
　八木は頭の後ろで両手を組んでぼやいている。
「それだけ過酷な環境ということでしょ。緩んでると本当に帰って来られなくなるでしょ。」
「松尾さんは真面目なこったぁ。」
「行きますよ。八木さん、松尾さん。」

「ええ、須田さん。」

演習の時に判明したのだが、須田は私と八木より1つ年上だった。身長自体は私のほうが高かったことに加えて誰に対しても敬語を使うのでてっきり同学年か1つ下かと思っていた。3人の中での最上級生ということから勇者のリーダーに抜擢されていた。

3つの影が大橋に映る。アプリを立ち上げ、祝詞を読み上げた。身体が光に包まれ、力が漲る。光は数秒で解け、勇者装束に変身していた。

足に力をこめて地面を蹴った。身体が宙を舞い、すぐに壁の直上へたどり着いた。

「行くよ…。」

私を先頭にして3人の勇者は壁の外に足を踏み入れた。景色が一変する。

「映像で見た通りだ…。」

大地は赤く染まり、ところどころに溶岩のような流体が流れている。空は漆黒に染まり、遠くに白い点のようなものの群れが浮かんでいる。足元の来島大橋だけが植物の根のような物体の集合体になって大地まで伸びていた。

「あつい…。装束である程度軽減してるのに…。」

須田が珍しく弱音をはいた。しかし同意だ。

橋の終点から大地に降り立った。泥のように少し水っぽいような感覚を足裏に覚える。

「土って、ここでいいのよね。」
「はい、特にどこで採取するかの指定はありませんでしたから。」
羅摩の蓋を開け、赤い土を入れ始める。
その瞬間、警告を示す表示が現れた。
「警告!?何!?」
「松尾!真上!」
八木が叫んだ。私はとっさに後ろにジャンプした。体勢を崩して地面に身体をこすりつけた。私がいた場所に目をやると数メートルはある白い球体が落下していた。あの下敷きになっていたと思うと身の毛がよだつ。
「これ、バーテックスじゃないの!?」
須田は動揺していた。学校で見た映像では白い点程度にしか見えなかったがこれほど大きいのか。
白い球体はモゾモゾと動いて地面から浮き上がった。巨大な白い塊に張り付いた口のような器官が私に向けられる。
(まさか…こっちを見てる?!)
バーテックスは何の予備動作もなく私のほうへ突撃してきた。すんでのところでそれをかわす。

「松尾さん！よけて！」
須田はそう叫ぶとボウガンを呼び出して矢を放った。その一撃は正確にバーテックスを貫き、消滅させた。しかし1体に気をとられているうちに遠くから白い点の群れが接近してくるのが見えた。
「完全に見つかったのね…。」
八木のほうを見ると腰をぬかして地面に崩れていた。ガタガタと身体を震わせている。
「八木！あなたも戦うの！ほら立って！」
「無理だよ！あんな化け物と戦うなんて！」
「松尾さん！群れが来ます！せめて松尾さんだけでも構えて！」
刀を呼び出して構えた。すぐにバーテックスの群れが降り注いだ。刀を振ってバーテックスを斬る。真っ二つに割れた個体は消滅するが次から次へと襲い掛かってくる。
「八木！八木は!?」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
叫び声がしたほうを見ると旋刃盤を盾代わりにしてバーテックスの攻撃から身を守っている彼女の姿があった。
「八木！戦いなさい！」

「八木さん戦って！」
　二人の叫び声は彼女に届いていない。
（まずい…このままだと八木が殺される。）
　自分に襲い掛かってくる敵を捌きながら八木のほうへと進んだ。
（確か本来はこう使うんだったよね！）
　旋刃盤に持ち替えて八木を襲っている敵のほうへと投げた。弧を描いた旋刃盤は数体の個体を巻き込んだ。再び刀に持ち替えて崩れこんでいる八木へ駆け寄り、襲い掛かってくる敵を斬る。
「八木！あなたこのままだと死ぬわよ！早く立ち上がって！」
「無理だよ松尾…、力が入らない…。」
（どうにかして逃げないと…でも八木が動けない以上は逃げることもできない。彼女を見捨てて逃げるなんてしたくない。絶対後悔する。とにかく時間を稼がないと…。）
「あっ！松尾さん危ない！」
　少し離れた場所で戦っていた須田が叫んだ。手甲に切り替えて迎撃するにも間に合わない。
「ちくしょおおおお！」
　私に突撃があたる直前で敵が消滅した。後ろを振り返ると八木は刀を呼び出してそ

れを突き出していた。
「ありがとう、八木。」
「ごめん松尾。やっと気持ちに整理がついた。」
　そういうと彼女は立ち上がり、鎌へ持ち替えた。
「須田！八木が動けるようになった！とっとと逃げていいんじゃない？」
「わかった！全員後退！」
　須田の合図で全員が一斉に架け橋目指して駆け始めた。
「しまった！」
　回避に失敗して空中で突き飛ばされた。地面に叩きつけられる。
「松尾！」
　八木が私のそばへ駆け寄り、敵を迎撃した。
「今度は私の番！大丈夫？」
「大丈夫、もういける。」
　少し痛む左肩を押さえながら橋を目指した。すでに須田は橋へ到達し、ボウガンで支援射撃をしてくれている。
「２人ともあと少し…！」

かろうじて敵の追撃を振り切って結界の中に飛び込んだ。青い海や緑の大地が目に飛び込む。
「帰ってこれたんだ…。」
遠くから青野先生と数人の職員が駆けてくるのが見える。3人は生還したその喜びと安堵からその場に崩れ落ちた。
「3人とも大丈夫ですか。」
「松尾さんがバーテックスの突進を受けました。それ以外は大きな攻撃を受けていません。」
「わかりました。羅摩のほうはどうでしたか。」
自分の羅摩を確認する。筒はつぶれ、いびつな形に変形していた。
「私の分はだめです。」
「私はどこかに落としてる…。」
「須田さんはどうだったのですか。」
「私の羅摩は…底が溶けてる。」
「そうですか…。ひとまず松尾さんと須田さんの分はこちらで預かります。それと、3人とも病院で検査を受けてもらいます。」
私たちは職員に羅摩を渡してから用意されていた車に乗り込み、病院へと向かった。

一人大橋に残った青野先生は橋の向こう側を見つめていた。

3話　明け方

検査が終わったころには窓の外は暗くなり始めていた。あの空の先に、あの壁の向こうに赤い大地が広がっていて化け物…バーテックスと戦っていたなんてまるで夢のような話だ。

しかし身体がそれを否定した。私はバーテックスの突撃をかわしきれずに傷を負った。その時地面に打ち付けた肩が特に痛む。

「打撲こそしていますが軽症で、今は炎症を起こしている程度ですね。あとは全身のいたるところにも軽度の火傷があります。おそらく大地と身体が擦れたときに装束で保護しきれなかったということだと思います。青野先生にも報告しておきますね。」

私を診た医者はそんなことを言っていたか。それと私の端末はシステムの改良のために一度回収されることとなった。今ポケットに入っているのは代替機だ。

診療室を出たところのベンチに八木と須田が座っていた。二人ともところどころにガーゼが充てられている。加えて八木のほうはふくれている…のか？

「八木、どうしたの。不機嫌そうだけど。」

「松尾も端末回収された？」

「ええ、まあ。でも代替機があるし。どうしたの？」
「端末にもう少しでクリアできそうだったゲームが入ってたんだよぉ！」
「は？」
「八木さん、ゲームが趣味でやっと攻略できるというところで端末を回収されたので怒ってるんです。」
「ああ…そういうことなのね。」
「二人とも大丈夫なの？データ移行さえさせてもらえなかったんだよ！」
「私は…ゲーム自体あまりしないし。」
「私もです。スマホで小説を読んだりはしてますが端末内に保存していたわけではないので。」
「須田さん読書が好きなんですか？」
「そうです。…そういえば私たち、一緒に戦ったのにまったく仲間のことを知らなかったんですね。」
「そういわれてみれば…。」
「この際ですし、友達になってくれませんか？」
「友達に？」
「だって一緒に戦わなきゃならないって理由でこの1週間かかわってきたと思うんで

す。だからお互いのことを気にかけたこともなかった。だから…その…、友達になってほしいなって。」

「…私もなりたいです。須田さん。」

「私もだよ、須田！」

ふくれていた八木も急に顔をこちらに向けた。

「彩葉でいいですよ。二人とも。」

「じゃあじゃあ、私も下の名前でいいよ！」

「なら…私も琴美で、いいかな。」

少しだけ、3人の心の距離が縮まった。そんな1日だった。

翌日からの訓練はもちろん苦しかった。勇者システムを使わない訓練だ。長距離ランニング、筋トレ…、とにかく基礎体力をつける訓練だ。それでも友達となら、伊雪と彩葉となら平気だった。

加えて4月になれば当然新学期が始まる。私たちは勇者であることを除けば普通の中学2年生なのだ。当然義務教育を受ける権利と義務がある。同学年の私と伊雪は同じクラスだった。今は伊雪の後ろの席で、授業中の仕事は彼女が居眠りをしたときに後ろからペンでつつくこと。この仕事は2時間に一度は回ってくる。まったく、どうすればここまで居眠りができるのか…。

勇者システムや壁の外のことは強く口止めされていた。私たちが突然壁の外のことを話したところで誰も信じないとは思うのだが。

そんな訓練と学校生活の日常がしばらく続いた4月中旬の休日、3人の勇者は来島大橋記念館に集められていた。

「本日、大赦本部からアップデートされた端末が届きました。」

青野先生は私たちにスマホを渡した。

「前回の戦闘の記録を元に改良を施しています。改善点としては耐熱性の向上とそれぞれの特性に合わせたシステムの最適化です。」

「最適化…ですか?」

「はい。大赦の初期の想定では西暦のシステムを改良した勇者システムでは神樹様が捻出なさらなくてはいけないエネルギーを少しでも減らすために勇者システムの規格統一化、つまり武器の統一化や装束の統一化を目指していました。しかし前回の戦闘データを解析するとそれぞれの戦い方に大きな差があり、システムで想定されていた統一範囲から大きく外れていることが明らかになりました。そこで基礎設計はそのままでそれぞれに合わせて装束の調節を行いました。加えて防御性能についても強化を行っており、耐熱性は格段に上昇しています。」

「システムがアップデートされて返ってきたということはまた壁の外に出るということ

ですか？」

彩葉が恐る恐る質問した。またあの地獄に飛び込むことにはやはり抵抗がある。

「そうです。あなたたち勇者の役目は壁外の調査と勇者システムのデータ収集。神樹様はあなたたちを必要としているのですよ。」

先生は冷たく言い放った。勇者になってから何度この言葉を聞いたのだろうか。

「時期は…いつですか。」

「ゴールデンウイークの休日初日です。」

「あと1週間しかないじゃないですか！」

「大赦の決定です。これも神樹様のためなのですよ。」

選択肢などなかった。神樹様を守るためという役割に組み込まれ、その役割に縛り付けられる。ならばせめて生きてこの役目を果たすしかない。

場所を移してアクティはしはま、改良された勇者システムが正常に作動するかの試験を行うためだ。

変身手順は変更なし、表示された祝詞を読み上げる。スマホの画面が変化し身体が光に包まれた。力が漲ってくる。数秒で光が解け、視界が戻ってきた。

（重くなってる…。）

装束を見てみると裾野が長くなっていたり、プロテクターのような部品が取り付けら

れていた。頭のバイザーにはアンテナのようなものが取り付けられていて視界の中にレーダー表示が追加されているのを確認した。
「へぇ、レーダー機能か。」
「壁の外はほぼ同じ景色ですから遭難しないようにということではないでしょうか。」
「ってことはやっぱ遠くに行く予定があるってことだよな…。」
「大丈夫、伊雪と彩葉さんとなら大丈夫。」
自分に言い聞かせるようにつぶやいた。二人のほうを見ると少し自分の装束と違うことに気が付いた。プロテクター部品のサイズが違ったり、彩葉のアンテナは私たちより多い2本のアンテナが装備されていた。リーダータイプといったところか。
「試験を始めます。課題は指定された目標をすべて破壊すること。それと須田さんは遠距離を強化してるのでその試験のため支援位置からは移動できません。」
笛の音が響き渡る。試験開始だ。
「いくよ、伊雪!」
「よしきたっ、後ろは任せたよ彩葉!」
「わかった。」
私と伊雪は縦になって飛び出した。その瞬間ボールが設置されたピッチングマシンから打ち出される。装束の性能だけでなく私たち3人の連携も試すらしい。

「伊雪！散開して二つ一気に壊すよ！」
「よし、タイミングは任せた！」
「…今っ！」
　1本の線が2本に別れた。刀を呼び出して降り注ぐボールを斬りながら走った。目標を一つ撃破。
「琴美！こっちも1つ壊したよ！」
「あとは…。」
　レーダーに目をやる。残りの目標はあと４つ、一番離れている物は５０メートルほどだろうか。しかしその一番離れた目標が破壊された。
（彩葉がやったの!?私たちからでも５０メートルあるのよ…。）
「２人とも、的はあと３つ。ここからは射線が通らない位置におかれてます。お願いします。」
「わかった、こっちで何とかする、伊雪！」
「ぎゃーぎゃー言われなくてもわかってますよ琴美さん！」
「減らず口を…。」
　武器をボウガンに持ち替えた。彩葉程ではないが私だって練習しているんだ。ボールを避けながら体勢を整え、矢をつがえる。

（今だ！）
　私のボウガンから放たれた矢はまっすぐに飛翔し目標を貫いた。
（伊雪のほうは？）
「よし、こっちもやった！」
　どうやら心配には及ばなかったようだ。残りの目標は頑丈な鉄の籠に入れられており、刀や鎌での破壊はできそうにない。加えてピッチングマシンも固められていて容易に近づくことさえできない。
「伊雪、ひとまず接近する。私が旋刃盤でボールを受け止めるから、後ろに入って。」
「わかった。頼むよ。」
　私は旋刃盤を構えて前へと歩みを進めた。射線に入ったピッチングマシンから次々とボールが飛んでくる。まるで土砂降り雨の中で傘をさして歩いているような感覚だ。
（このまま受け続けても目標の破壊ができない。…ならば一か八か賭けてみるしか！）
「伊雪！一瞬この土砂降り雨に切れ目を作るから、あなたは飛んで！」
「面白いねぇ、その話乗った！」
　威勢のいい返事が後ろから聞こえた。私は旋刃盤を上に放り投げ、そのまま仰向けで地面に倒れる。旋刃盤はいくつものボールを切り裂き、若干の空白を作り上げた。伊雪はその空白に体を通す。彼女は空中に身を浮かべ、手甲を呼び出し身体を翻した。

（よし！そのまま行って！）
その瞬間地面からボールが打ちあがった。上向きの機械があったのだ。
「…やっぱり来ましたね。」
彩葉のつぶやき声が聞こえた。それと同時に伊雪に迫るボールが破裂、彼女を妨げる物はなくなった。
「うおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
彼女は叫び声とともに拳を目標に叩きつけた。衝突は土を巻き上げ、視界を奪う。
「伊雪！大丈夫!?」
吹きかかる土埃を払いながら彼女の姿を探す。
「はぁ、手が痛い…。」
土埃が収まり彼女の姿が見えた。仰向けで地面に倒れている。それとすぐそばに籠ごとひしゃげた目標もあった。
「勇者がそう地面で伸びてるんじゃないの、さあ立って。」
「はは、まったく。人を飛ばさせといてよくいうよ。」
私は手を差し出して伊雪を引き上げた。
「ありがとうございます。琴美さん。伊雪さん。」
援護位置にいた彩葉が駆け寄ってきた。

「お礼をいうのはこっちのほうだよ。彩葉の援護がなかったら絶対攻略できなかった。」
「これには私も同意、やっぱり彩葉さんの射撃精度は桁違いね。」
3人は喜びを分かち合っていた。
「あなたたち3人の試験を見させてもらいました。よくやっていますね。」
珍しく青野先生の声に柔らかさを感じた。表情も少し緩んでいる。
「これなら壁の外でも大丈夫そうね。今度の目的地が決まりました。かつてこの四国と本州をつないでいた道の反対側、尾道です。」
「オノミチ…?」
聞いたことがない地名だった。歴史の授業では細かい地名までは習わないのだ。
「本州の広島県にある土地の名前です。西暦の時代には本州と四国の架け橋として栄えていたそうです。」
「その、オノミチの土を持ち帰ることが今回の調査の目的ですか。」
「その通りです。体調を万全にしておきなさい。」
そういうと先生は私たちに背を向けて歩いて行った。
私たちは再び赤い大地に身を放ることになる。これが運命というならば、生きて役目を終えることこそが使命だ。そう…心に決めた。
今日も空は青い。

4話　薄明

4月下旬となれば気温もあがりそろそろ袖を短くしようかと思いはじめる。加えてゴールデンウィーク目前、教室の空気はお祭り騒ぎで授業中ですら休日の予定を相談する声がどこからともなく聞こえてくる。そんな中目の前には相変わらず絶賛居眠り中の八木伊雪…。

私たちが勇者になって1か月ほどが過ぎただろうか。世界は壁の外の地獄を知らぬがまま平穏な時を刻んでいた。

「うわ、さっむい…。」

「これなら上着を持ってきてたほうがよかったかも…。」

ゴールデンウィークの休日初日、私たち3人の勇者は来島海峡大橋記念館に集められていた。まだ4月であるにも関わらずの夏日、私と伊雪は夏服を着てきていたのだが館内は入り口から空調が行き届いており半袖の私達は身を縮めていた。

「なあ彩葉…、その上着私に貸してくれよぉ。」

「だから言ったんですよ。上着をもってくるべきだって。」

「こんなに冷房が効いてるなんて聞いてないぞ!」

「伊雪、彩葉さんの助言を聞かなかった私たちが悪いんだから我慢しないと…。」
「むぅ…。」
少し大げさに落ち込んで見せる伊雪を横目に私たちはいつもミーティングを行っている場所へと向かっていた。そこには青野先生がいて、いつもと変わらない雰囲気をまとっている。
（先生の周りだけ5度ぐらい気温が低そうね…。）
「八木さん。これから壁の外に赴くというのに気が緩んでいませんか。」
先生は伊雪の様子を見るなり鋭い声で咎めた。一瞬私の心を見透かされたのかと思い肝が冷える。
「勇者3名、揃いました。」
「ありがとうございます須田さん。それではミーティングを始めます。今回の目的は来島大橋海峡に連なる本州の対岸。尾道への調査とサンプルの回収です。この調査は今後の足がかりにもなる重要なものです。心してかかるように。」
「サンプル、つまり土を回収するということは羅摩（かがみ）を使うということですか。」
「その通りです松尾さん。前回の壁の外の調査の時に回収した羅摩を改良したものを今回は使用します。」
「バーテックスは襲ってくるのでしょうか。」

「壁の外に出る以上は当然あるものと考えてください。」
「…わかりました。須田以下2名、尾道調査に行きます！」
「3人とも無事で帰ってきなさい。」
　私たちは新しい羅摩を受け取り、来島海峡大橋に臨んでいた。スマホで勇者システムを起動し、祝詞を読み上げる。もはや画面を見らずとも読み上げることができる。それだけ勇者になったということだろうか。身体は光に包まれ、数秒経ってそれが解けると制服は勇者装束へと変化していた。大地を蹴りだし、結界の外に出る。
「来たんだ…。」
　壁の内側の青い海と空の跡形はなく、赤くただれた大地と漆黒の空だけが永遠と続いている。熱気が吹き付ける。まるで蒸されているような感覚だ。
「バーテックスに襲われる前にできるだけ進みましょう！」
　彩葉はそういうと先頭に立って大地を蹴った。私たちもそれに続く。
　前回は壁のすぐそばでさえバーテックスに襲われた。今回は壁から少し離れるのだ。戦闘をするにしてもできるだけ進んでおきたい。
「あーもう！あいつらこっちに気が付きやがった！」
　少し進んだところで白い球体がこちらに進路を向けた。彩葉はすぐさまボウガンを呼び出し迎撃する。

「目的地までは直進で止まらずに行きます。飛んでくる敵はよけるなり撃ち落とすなりで対処して！」
「ったく無茶なことをいうよ彩葉は、私あんましボウガンは得意じゃないんだって。」
「伊雪、やるしかないのよ。文句言わない。」
「今度は群れが来ます。進路方向右から！」
　星屑と呼ばれる白く丸い巨大な生物が砲弾のように降り注いだ。神樹様の加護のおかげで矢が切れることはないがリロードは手動、それも星屑をよけながらとなると一苦労だ。
「なんで銃じゃなくてボウガンなんだよ！」
「せめて弓がよかった…引き絞る動作は同じじゃん…。」
「彩葉さんまで何言ってるんです！私は刀に持ち替えますよ。」
「あ、じゃあ私はいつも使ってる鎌で行きますか！」
　弱音こそ吐いてはいるが誰一人手を抜くことなく星屑を迎撃していた。
「彩葉危ない！」
　装弾が間に合わずに数体の星屑が彩葉に迫った。彼女はすぐさま手甲を呼び出し星屑を殴りつけた。いくつもの球体がひしゃげ、へこみ、そして消滅した。
「「おお…。」」

「やっぱり近距離ならこっちのほうが楽ですね。」
　そういうと彩葉は星屑を蹴りつけ、踏み台にし、瞬く間に星屑の数を減らしていった。
「なあ、琴美…。彩葉を怒らせないようにしとこうな…。」
「何です？八木さん。」
「いやいや、何でもないですよ彩葉さん！」
「伊雪が珍しくさん付け…これは明日は雨ね…。」
　彩葉の意外な活躍もあって私たちは順調に尾道へと向かっていた。
「なんだあれ？」
　一番初めに気が付いたのは伊雪だった。赤い大地が陥没し、白い何かで埋め尽くされていた。レーダーを確認するとこの陥没地が尾道を示している。3人は陥没地の淵で中の様子をうかがっていた。次の瞬間、白い何かが分裂して星屑に変化した。
「ねぇ…ここが尾道…。なんだよね？」
「ここが尾道であっているはずです。」
「システムのバグ…じゃないよな？」
「勇者システムの本体は神樹様です。神樹様が間違うはずがないです。」
「ここが尾道だとしてどう土をとるのさ、あの白いの全部バーテックスだよ？」
「剥がすしかないんじゃないかな。」

「でも、剥がすとなると大量のバーテックスを相手にするんだよ？採取なんてできないよぉ…。」
「でも、サンプル回収が今回の目標です。」
「２人で１人を守ればなんとかならない？」
「なるほど…。その案で行きますか。」
「じゃあ彩葉が採取、伊雪と私が防衛。これでいいわね。」
「はい。」「よし。」
　３人の羅摩を彩葉に預ける。そして陥没地に向かって大地を蹴った。彩葉は手甲を呼び出して落下に合わせて地面を殴りつけた。衝撃波が付近の地面を引き剥がし、大地を露出させた。
「よし、行くよ！」
「まかせなさいって！」
　白い大地だったものは急速に分裂し変化、大量の星屑が陥没地全体を覆った。
　旋刃盤を呼び出して放り投げた。いくつかの個体を切り裂いたもののまったく数が減ったように思えない。面が迫ってくるような突撃が繰り返された。刀に持ち替えて何度も斬ってはいるが、数は減らない。
「あーもう！こんな無限沸きゲームでもやったことないって！」

「彩葉さん！土は！」
「今二本目！」
「これ倒すよりも盾で耐えたほうがいいよぉ！」
「ないものはねだらない！今あるもので戦うのよ！」
　まだ囲まれて数分と経っていないのにじりじりと押されてきている。伊雪も私も武器を次々と切り替えて戦っているものの迎撃できる数には限りがある。
「彩葉！まだ!?」
「最後…よし！」
「で！これどうやって逃げるの!?」
「一点突破！」
「もう無茶苦茶だよぉ！」
　彩葉が真上に向かって跳び、手甲で包囲を殴った。すかさず伊雪と私が旋刃盤を投げ込んだ。包囲に若干の空白が生まれる。私たち3人はその空白に身を通し、陥没地の外へ出た。次々と星屑が吹きあがり、逃がさないばかりに後ろから迫ってきた。
「無限沸きも嫌だけど、こんな鬼ごっこも嫌だよぉ！」
「いいから！早く逃げるの！」
「だめです、追いつかれます！」

足は星屑のほうが早く、私たちを追い越した個体が引き返して突撃してくる。
「まずいって！」
「足を止めないで！止めると囲まれます！」
何度も星屑とぶつかった。それでも生きて帰るために歯を食いしばって進み続けた。
「橋だ！」
遠くに植物の根のようなものが見えた。
3人はかろうじて結界の中に飛び込み、そのまま地面に倒れこむ。
「はぁ…はぁ。なんとか、帰ってこれましたね…。」
「やった…。死ぬかと思った…。」
「死なないわ…伊雪も彩葉もいるんだもの…。」
装束の変身が解け、2人の顔が見えた。それと同時に全身が軋むような痛みを感じた。相当な負担を身体にかけたからだろう。
「ねぇ…動ける？」
「いやぁ…こりゃ無理だな、体が言うことききいてくれねぇや…。」
「青野先生が来てくれますよ…。」
先生は駆けて来てくれた。
「あなたたち大丈夫!?」

「ああ、先生。おかげさまでなんとか。ただ体に無理させてるみたい。」
身体をゆっくりと起こした。
「無理しないで、すぐに病院で治療を受けてもらうから。」
「先生、サンプルはちゃんととってきました。」
「ありがとう。」
彩葉が３つの羅摩を渡し、３人は到着した救急車へ乗り込んだ。
先生は羅摩を持ったまま橋に残っている。車内から見えた彼女は結界のその先を見つめていた。

5話　黎明

「ねぇ…伊雪、それ飽きないの？」
「そんなことないよ、彩葉だってずっと本読んでるわけだし。」
　昨日壁外調査に行った後私たちは救急車で搬送され検査を受けた。意識ははっきりとしているものの全身にあざや打ち身が見られたために経過観察の意味も含めて３人まとめて数日の入院となった。端末は回収されたがもともと渡されていた代替機を使って伊雪はゲームをしていた。一方の私はすでに暇を持て余しており、そろそろ病院を抜け出したい気分だった。
「ねぇ彩葉さん。検査もすんだんだし、ゴールデンウィークぐらいのびのびとさせてほしいものですよね。」
「確かにそうですね。でも、お医者さんがいうことには逆らえませんから。」
「身体に影響自体はないんでしょ？だったらもう退院でいいじゃない。」
「だめですよ、自分の身体を動かしてみてくださいよ。そう言うことを聞いてくれるものじゃないはずです。」
「むぅ…。」

実のところ図星だ。勇者になってからずっとあわただしかった。今回の入院はゆっくりしろという命令でもあるのだろうか。
「いっつも私に口出ししてる琴美がこうだとなんか面白いな！」
「何よ伊雪。」
ゲームをしているのかと思ったらしっかりと話を聞かれていた。私は伊雪を睨む。
「はは、冗談だって。琴美も何か本でもゲームでもすればいいじゃないか。」
「それがねぇ、今まであまり触れてこなかったというか。自分のじっとしている時間がなかったのよね。」
「そういえば、2人はどこの出身でしたっけ。多分聞いたことないですよね？私は愛媛出身なのですが。」
「私は香川。」「高地だ。カツオがうまいぞ！」
「琴美さんが香川、伊雪さんが高地か…なるほど。」
「ダブってないんだな。まあダブりがないことはなんとなくわかってたけど。」
そんな他愛もない話をしていた時、ふいに病室の扉が開いた。
「楽しそうでなによりです。体調もすぐれているようですし。」
そういって病室に入ってきたのは青野先生だった。
「先生、どうかされたのですか？」

先生の服装は神官服だった。そうか、私たちの担当である先生も当然大赦の人間であるのか。
「今日伝えることは1つだけです。あとはあなたたちの容体を確認しに来ただけですね。」
「先生、実は私たちの事を心配してるんですか?」
「伊雪さん、私を茶化すのもいい加減にしなさい。」
そうは言うものの先生の頬は少し赤くなっていた。
「先生、八木のことは放っておいていいので、その伝えることを教えてください。」
「ええ、そうでしたね。あなたたちの武器についての事です。」
「…武器?」
「はい。今回の結界外調査の時、武器の切り替えや対応できる範囲などに不都合が生じたはずです。そこで武器を今までの5種から銃剣と盾の2種類に変更することが決定しました。おそらく今使いこなしている武器がすべて使いこなせるあなたたちならば2種ぐらい使いこなせるはずです。」
確かに不都合が生じたのは確かだ。そこで銃剣と盾か…。ずいぶん思い切った決定をしたものだ。
「銃剣と盾…ですか。」

「担当の報告によればこの武器の選定理由は遠近問わず対応できる武器であること。それと採取の際にバーテックスから身を守る装備の必要性が認められたため。だそうです。一応5種の武器も使用できますが、データを取るためにこの銃剣と盾をメインに使用してもらいます。」
「わかりました。」
　そのあと先生はそれぞれの顔を1回づつ見るとどこか安心したように病室を出て扉を閉めた。
　ゴールデンウィークの後、私たちは壁の外に駆り出されることが増えていった。そのほとんどは結界壁の上から周辺の状況を記録するというもの、大橋をわたっての調査ほど苦ではないがやはり暑さは身に応える。頻度としては週に1回程度、結界のすぐそばではあるが、万が一のために盾を構えての記録だった。
「あなたたちには次の調査で本州の比婆山に行ってもらいます。」
　4，5回の記録の後、青野先生が口にしたのはまた聞いたことがない地名だった。
「それはどこにあるのですか?」
「前回の尾道よりも遠いですがかつての広島県と島根県の境にある場所です。」
「また、あいつらと戦うのですか…。」
「バーテックスとの遭遇はあるでしょう。ただ、前回よりも戦いやすいはずです。」

「わかりました。」
　とは言ったものの、私たちが遠方に出て無傷で帰ってこれたためしがないのを大赦はわかっているのだろうか。それでも神樹様のため…なのか。
「まったく、あの白いのは暑さなんて感じないのかよぉ。」
　いつもの通りの伊雪の悪態が赤い大地に響き渡る。運の悪いことに大橋から少し離れたところで星屑数体と遭遇、小規模の戦闘が発生し体力が持っていかれた。まだ遠方に白い影が見える。私たちにできるのは見つからないことを祈るだけだ。
「来ます！」
　残念ながらお祈りは失敗だったようだ。先頭の彩葉が戦闘開始の引き金を引いた。数百メートル離れた星屑を彩葉の狙撃が貫く。
「ひゅー、彩葉やるぅ！」
「冷やかしはいいから伊雪さんも構えて！」
「わかってるわかってるって、」
　３人の勇者は降りかかる火の粉を払い、比婆山に向かっていた。
「ねぇ、なんか暑さ増してない？」
「気のせい…にしたいけれども気のせいじゃなさそうね。」
「システムも温度上昇を記録してるみたいです。熱風が凄いです…。」

「また尾道みたいに巣窟になってるのかな。」
「その可能性は高いですね。」
「いやだよまたあんなのに飛び込むのは。」
「ただ、その時が来たら腹はくくってくださいね。」
　比婆山に近づけば近づくほど熱風が強くなっている。尾道とはまた違う何かがあるのだろうか。
「遠くに何かが…、何!?」
「何か見えたの？彩葉さん。」
「真正面…あれは空に裂け目？」
「まさか…あれが比婆山か？彩葉。」
「そう…ですね。」
　目前に広がるのは起伏の少ない赤い大地が異様にねじれ、吸い上げられるように空に伸びているまるで巨塔のような不気味な大地と暗黒が切り裂かれて白い光が差している空だった。かなり離れていてもわかる巨大さ…異質なものではあるがどこか神々しさがある。それに加えて不気味な大地にはここからでもわかるほど大きな白いシミがいくつもついていた。おそらくあのシミひとつひとつがバーテックスの集合体なのだろう。

「どうするんだよ、なんなら尾道よりもやばくないか？」
「あんな景色見たのは初めて…。でも採取をしなければなりません。」
「やることは単純、二人で一人を守ってあとは撤退、でしょ？」
「結局かよぉ…。あーもう、わかったわかった。腹はくくりますよっと。」
　暑さはますます増している。
「よし、目的地についた。まだ気が付かれてないなら2人で採集しましょう。松尾さん、見張りはお願いできますか？」
「わかりました。」
　羅摩を渡して銃剣を呼び出して警戒する。不気味な大地のふもと、光の当たる大地、上を見上げれば眼がくらみそうだ。その光が陰った。
「まずい、来ます！」
　とっさに盾に持ち替え陰を受け止めた。星屑、旋刃盤で受け止めていたならば身が持たなかっただろう。
「ちぃっ、」
　伊雪の剣先が受け止めた星屑を切り裂いた。
「大丈夫か、琴美。」
「ええ、おかげさまでね。それより誘いこまれたわね…。」

ねじれあがった大地から大量の星屑が沸きだしてきた。
「採取量は基準量を超えました！撤退できます！」
彩葉は急いで3つの羅摩に土をつめたもののすでに遅かった。大量の星屑が私たちを取り囲んでいる。加えて星屑の様子がおかしい。一点にくっつき、もがき、結合していた。
（何…まさか融合体になってる!?）
融合体…いや、完成体と言われていただろうか。西暦の時代に勇者を苦しめ、そのうちの数体は勇者を屠ったとされる悪魔。
「裂け目から何か出てきたぞ！」
伊雪の見上げる先の裂け目から逆向きになった四角錐が振ってきた。それは融合しているバーテックスの中に飲み込まれる。すると不確定にもがいていた白い巨体が形を整え、変化していく。二つの顔のようなものがこちらを覗き、輪のような形状。
「これはサジタリウス!?」
サジタリウスバーテックス。西暦の時代に現れた完成型の1体。資料だけは見たことがあるが、実際に眼にすることになるとは思ってもいなかった。
はるか上空から大地を見下ろすサジタリウスは大きく一つの口をあけ、1本の針を生成した。

「琴美さん！伊雪さん！全力で逃げて！」

彩葉が叫んだその瞬間、針が放たれた。針はねじれあがった大地の頂点に突き刺さり、それを砕いた。巨塔が崩れ落ち、あたりに落ちるがれきは周辺の星屑さえも巻き込んだ。

「彩葉さん！伊雪！」

私はかろうじて宙に跳び、がれきの直撃は免れた。しかし他の２人の状況がわからない。装束のレーダー機能が今の一撃で麻痺を起こしている。

「こっちは大丈夫。」「２人とも無事ですか！」

降り積もった瓦礫に人影が２つ、どうやら回避できたらしい。サジタリウスは先程針を放ったほうとは別の口を開いた。

「盾を！」

次は大量の矢が降り注いだ。私達は盾を身体に被せ、腕で支え凌いだ。それでも何本かは盾を貫通し皮膚を掠め、切り裂いた。運良く刺さりはしなかったものの痛みが身体に奔る。

「ちくしょおおお！」

伊雪は銃剣を呼び出し、サジタリウスに向かって乱射した。しかし傷一つつくことがない。

「これならどう！」
　私は思いっきり地面を蹴り、上空のサジタリウスへと銃剣を突き立てた。ところが刃は表皮に刺さるどころか根元から折れた。
「何よこいつ！」
「琴美さん！倒すのは無理です、早く逃げますよ！」
　気がつくと周りにいた星屑は数を減らしていた。先の針と矢の雨によって殲滅されたのだろうか。
　全力で駆けた。サジタリウスは再び針のようなものを生成している。
「一番はじめのやつが来る！」
「私が防ぐ！」
　伊雪が敵の方へと身体を向け、盾を構えた。
「無茶よ！さっきの矢でさえ貫通したのに！」
「弾丸ってのはこうふせぐんだよっ!!」
　放たれた針は伊雪の構えた盾にぶつかり、貫通しなかった。おおよそ水平に構えられた盾によって針はその軌道を空へと向け、はるか彼方へ飛んでいった。
「あんた、どうやったの!?」
「跳弾ってやつだよ。ゲームでやってんだよこっちは！」

「それを化け物相手によくやるわね。」
「次、来ます！」
「盾を斜めに構えるんだ！そうすればある程度はマシになる！」
再び矢の雨が降った。端を貫く矢はあったものの中央部の貫通弾はない。それでも台風の時の土砂降り雨のような衝撃だ。
絶対的な力を振るう完成体、まだ壁は遠い。

6話　東雲

雨は降り続いていた。激しく盾を叩きつける轟音、板一枚の外に広がるのは死ただ一つ。

サジタリウス・バーテックスは出現したその場から動くことなく私たち3人の退路を断っていた。盾自体も何度も穿たれ、端の薄い部分はすでにその原形をとどめていなかった。

「どうにかならないの!?あいつ。」

「このまま攻撃の合間を縫って少しづつ逃げるしかないです!」

「今度は針のほうが来るぞ!」

サジタリウスは2つあるうちの1つの口のような器官を大きく開け、針のようなものを生成していた。

「回避が間に合わない!」

「私が何とかします!」

彩葉は銃剣を呼び出し構えた。その刹那、サジタリウスの矢が放たれる。一直線に私たちめがけて飛来する巨大な針。その音速の砲弾に向かって彩葉は引き金を引き、空中

で撃墜した。
「…よし。」
「今だ、このタイミングにできるだけ逃げるぞ！」
「待って！」
　伊雪は地面を蹴り空中へと舞い上がる。しかしそれを待っていたかのように彼女めがけてもう一本の針が放たれた。
　サジタリウスの矢は勇者の盾を貫いた。
「伊雪！」「伊雪さん！」
　まっすぐ地面に落ちる影。私と彩葉が駆け寄ると左腕を押さえる伊雪の姿があった。左腕の装束は裂け、その周りが赤く染まっている。
「大丈夫なの?!」
「大丈夫。盾は貫通したけど私への直撃は免れたから…。それよりあいつは?」
　サジタリウスはイレギュラーに巨大な針を2連射したためか沈黙している。まだ完成体になって数分、エネルギーの制御がうまくいっていないのだろうか。
「今なら逃げられるんじゃないか?」
「でも伊雪、けがしてるんじゃないの?」
「それよりもまず逃げよう、3人で生きて帰れるなら腕の1本や2本どうってことない

よ。」
「…わかりました。今は逃げることを最優先しましょう。」
比婆山からとにかく離れることだけを考えて走った。
ようやく壁が見え、結界に飛び込んだ。青い空の下で私たちは倒れこんだ。私の意識はそこで途切れている。
次に気が付いた時まず眼に入ったのは天井だった。ピッ…ピッ…という電子音だけが部屋の中に響いている。
（…私…生きてる…？）
意識が戻るにつれ体のいたるところから痛みを感じた。
「うっ…うわっ…くっ…。」
身体を少し動かしただけでもこの有様である。それでも痛みに耐えながら身体を起こした。辺りを見回してみる。部屋は小さく、私のほかに誰もいない。私のいるベットの側にある窓の外には光がともった街並みが映っていた。
（ここは病院か…。そうだ、伊雪と彩葉は!?）
ベットから出ようとしたとき、機器がけたたましい警告音を上げる。すぐに看護師の女性が２人、血相を変えて部屋に駆け込んできた。
「松尾さん！…ああ、意識が戻った…のですか、はぁ…。」

どうやら私から計測用の機器が取れていて異常があったと間違えられたらしい。私の様子を見ると胸をなでおろしていた。
「私は大丈夫です。それより、伊雪と彩葉はどこですか?」
「八木さんと須田さんも命に別条はありません。ただ、どちらともまだ意識は戻っていませんが…。」
「私、行きます。どこにいるか教えてください。」
「だめです松尾さん。あなただって意識が戻ったばかりなんですから。」
看護師の制止を振り切ってでも2人を探しに行こうと思った。しかし立ち上がった瞬間にバランスを崩し、地面に倒れる。全身の痛みが一層増し、力を入れることさえできなくなった。
その後、皮肉にも看護師の介助あってベッドの上に戻った。そこで私の意識は再び途切れる。
次に気が付いた時には身体の痛みはすでに引いており、自力で立つこともできる。そっと扉を開けて病室を出た…ところで看護師に見つかった。
「松尾さん…、まあいいでしょう。その様子だとだいぶん回復してるようですし、病室を移ることができますよね。」
「…はい。なぜですか。」

「須田さんと八木さんも意識が戻り、ある程度の回復が見受けられたからです。」
「よかった…。」
「では、こちらへ。」
　案内された病室には見覚えがあった。前に入院した時と同じ部屋である。開いた扉からは八木と須田、それと青野先生が見えた。今日も先生は神官服である。
「松尾さんも大丈夫みたいですね。」
「はい。」
「では私はこれで、」
「もう行くのですか？」
「ええ、私もいろいろな合間を縫ってきてますので。」
「そう…ですか。」
　先生は小走りに病室を後にしていった。
「琴美、生きてたか？」
　先生が行ったほうを見ていると背後から伊雪の声がした。
「何、私を勝手に殺さないでくれる？」
　私は振り向いて伊雪のほうを睨んだ。しかし彼女と彩葉は笑ってこちらを見ていた。二人とも、特に伊雪は腕に包帯を巻かれていたがその顔はいつも通りだった。私は照れ

くさくなって思わず目線をそらす。
「な、何よ。」
「いやぁ、やっぱ琴美だなって。」
「やっぱり琴美さんですね。」
「…むぅ…。」
私は顔から火が出る思いだったが、いつまでも廊下に立ってるわけにも行かずに自分用のベッドに座った。
今度の入院期間は短かった。とはいえ教室に戻ればクラスメイトからの質問攻めだ。確かに2人同時に入院したのだ。当然興味持たれるだろう。私と伊雪は壁の外に出た日に伊雪と彩葉とともに交通事故に巻き込まれた。とされているようだ。秘匿主義…か、私たちが天の神を相手取って戦ってる間も結界の中では日常が流れている。私たちの努力を知ってもらいたいとも思うが、今はこの日常が流れているだけで満足するしかないのだろう。
再び結界の外での観測調査の日々が続いた。どこまでも赤い大地、漆黒の空、遠方に浮かぶ白い影…。どれも見慣れた景色になってしまった。西暦の時代、神樹の外にも内と同じような世界が広がっていたという。熱い地域や寒い地域など多種多様な環境の中で人類は生きていたらしい。この神樹の中に追いやられた人類もその環境に適応し

たのだろうか。
「いつ見ても変わらない景色ですね。」
「まったく…四季ぐらいあってもいいと思うんだけどなぁ。」
「…この大地でどう四季を表すのよ。」
　私はため息交じりにそう答える。確かに毎回同じ景色を見て回るだけ、さすがに飽きが来るというものだ。それに加えて結界のすぐそばでバーテックスもよりついては来ない。灼熱の壁の上をただ歩いて回るだけ、戦闘よりはよっぽどマシではあるが…。
　一通り指示されたポイントの観測を行い、結界の中へと戻る。数メートル歩いただけで景色はがらりと変わり、梅雨の蒸し暑さが私たちを襲った。ちょうど雨上がりの夕方、空気中の湿気が一番多い状態である。拠点の来島海峡記念館に入って変身を解く。室内は空調が行き届いており、快適だった。
「お疲れ様です、勇者の方々。」
　3人がタオルで汗を拭っていた時、背後から聞いたことのない男の声がした。振り返ると大赦の仮面を付けた神官が1人立っていた。
「…どちら様ですか?」
「ああ、これは失礼。私は速水、あなた方勇者の記録統率官を任命された…まあ事実上の現場責任者と思っていただければよろしいでしょうか。」

「そのような方がどうしてここにいらっしゃったのですか?」
彩葉が一歩前に出て質問した。
「いえ、特別急ぎの用ではないのですが現場責任者たる私が勇者様にお会いしたことがないというのは如何せん不都合が生じますことを危惧した次第です。」
「…なるほど。」
「ああ、それと一つ。今後の方針についてなのですが、近々出雲への調査が決定しましたのでご報告をと。」
また聞いたことがない地名である。尾道、比婆山と同じ本州の地名なのだろうか。
「…そう、ですか。」
「では、私はこれで失礼させていただきます。今後ともよろしくお願いします。」
そう言って彼はこの場を後にした。
数分の出来事であったがとても長く感じた。速水という神官の持つ空気感だったのだろうか。

7話　曙

梅雨も明け、夏本番の7月下旬。3人の少女が来島海峡大橋の入り口に立っていた。数回の結界近辺の調査などで長距離遠征が可能であると大赦が判断、出雲への遠征実施を決定したためだった。橋へと続くアスファルトには陽炎が見え隠れしその熱さを物語っている。それでも結界の外に比べれば何の問題もない環境なのかもしれない。

「天地にきゆらかすはさゆらかす――。」

もはや幾度となく口にした祝詞、今では身体が憶えている。目前が光に包まれ、身体の内から力が沸き、漲っていく…。数秒の後に光は解け、身体は勇者装束に包まれた。

「いきましょうか。琴美さん。彩葉さん。」

「はい!」「おう!」

3人の勇者は赤い大地へと足を踏み入れた。その瞬間凄まじい熱風が吹き付ける。

「何これ、今日は格段と熱くないか?」

彩葉が不満を口にした。結界の外の気温はその日によって変化しているようだ。それでも今日は今まですべての中でも1位2位を争うレベルで熱い。この大地にも夏が来た…いや、さすがにそういうわけでもないだろう。

それと気になることがもう一つ。星屑と一度しか遭遇していないことだ。結界のすぐそばで少数の星屑と遭遇戦をした以降姿さえ見ていないのだ。運がいい…と言えばそれまでなのだが、出雲まで半分を切った時点でこの状況は経験上異例である。結界外は未知数の世界だ。3人はいつも以上に緊張を奔らせていた。

「なあ、あれから2人は星屑の奴らを見た?」

「いいえ…。」「私も見てないよ。」

伊雪はこの状況に不安を募らせている。あの彩葉でさえ何度も方向を間違えてないかを確認した。それほどまでに異様なのだ。

「出雲までもう少しになっているのですが、この付近に星屑はいませんね…。」

「何かが起こっているのでしょうか。」

「またあの不気味な大地が形成されているのかも…。」

「それはいやだなぁ、またサジタリウスの砲弾を弾くのは骨が折れるっての。」

出雲へあと数分という時だった。大地が裂け落ちたのだ。裂け目からは大量の星屑が出現し、その奥に星屑ではない何かの姿が見えた。

「…まずい!」

突如として突き出された角のようなものが私をかすめ空を切り裂く、一瞬でも判断が遅ければ今頃あれで串刺しだっただろう。明らかに星屑とは違う攻撃…完成体のバー

テックスである。
「…カプリコーン・バーテックス。」
　４つの角を多彩に操る超大型の化け物。４つを一つにまとめることもでき、その威力は絶大である。
「こいつは倒せないぞ…。特別な装備がないと倒せないタイプの敵じゃん…。」
「伊雪、そんなのないから私たちにできることは全力で逃げることよ！」
　前回のサジタリウスの例から現在の勇者の武器では完成体に傷一つつけることができないことは明らかであり、完成体が出現した場合はいかなる場合でもお役目を中止し直ちに退避するようにとは言われていた。しかし…。
「何!?」
　カプリコーン・バーテックスは４つの角を地面に突き刺し、大地を震撼させた。とてつもない揺れ、まともに立っていることもできず地面に倒れる。すぐさま1本の角がそれぞれを狙って飛翔した。あるいはは盾を呼び出し防ぎ、またあるいは地面を殴りつけ反動で回避する。３つの角を地面から離したことにより揺れは収まった。
「撤退します。二人ともカプリコーンの動向に気をつけてください。」
　彩葉の合図で３人は大地を蹴り、一気に距離を取ろうと試みた。
（ありがたいことに空中には星屑がいる。空中ならあいつの地震も効かない！）

海の上に浮かんだ舟を次々と渡った八艘跳びのように星屑を踏み台に宙を駆けた。
カプリコーンの角は次々と繰り出され、数秒前に蹴った星屑を貫いていく。
「あいつ、同じバーテックスなんて関係無しね。」
「私達を殺せさえすればいい。そんな殺気を感じます。」
「どうすんのさ！あいつ連れて結界まで帰るの?!」
「そんなことしたら結界が、神樹様がどうなるかわかったもんじゃないじゃない！」
「策はあります。」
「彩葉、何だそれ?」
「カプリコーンの繰る角、あれは相当強力ですがそれにつながる組織がまだ細いです。そこならば私達でも切れるはず。」
回避、防御を繰り返しながら角の向こう側に眼をやる。柔軟に伸び縮みする組織は確かに細い。あれを切り落とすことができればカプリコーンの戦力を大幅に削れるだろう。
「でもどうすんの?」
「一番初めの攻撃を誘発させて一気に叩き切ります！」
「なるほど、彩葉さん！誘発させるのは伊雪とやるから彩葉さんが斬って！」
「私はもう確定なの琴美!?」

「いいからやるの！２人の盾でカプリコーンの攻撃を受け止める！」
「あーもうわかったよ！」
　私と伊雪は撤退の足を止め、２人並んで大地に踏み込み盾を合わせて構えた。カプリコーンは足を止めた２人を確実に仕留めようと４つの角を組み合わせた。
「来る！」
　合わさった角はドリルのように回転しながら構えた盾に衝突した。相当な轟音が響き渡り、盾の表面からは火花が散った。身体を支える足は地面に沈み込んでいく。持って３０秒だろうか。表面の層や端の部分の細切れが後方へ吹き飛ばされていくのが見える。
「彩葉！」「彩葉さん！」
　私たちが受け止めた瞬間には彼女の姿はすでにはるか上空にあり、銃剣を構えて一直線に落下していた。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
　一直線に降り降ろされた一撃は角と本体の間にあった組織を割いた。受け止めている角の回転速度が落ち、やがて止まって地面に落ちる。
「狙い通りやったのね。」
「今なら逃げられます。全力で！」

３人は駆けた。宙を舞い、追手の星屑さえも振り切って結界に飛び込んだ。
「はぁ…帰ってこれた。」
「でも出雲まではいけなかったね。」
「しょうがないよ、アイツが出てくるのが想定外だよ。」
変身を解き来島海峡大橋記念館に入る。そこには青野先生ともう一人神官の姿があった。体型から見るに、前日私たちの前に現れた速水という神官だろう。
「どうやら完成体と遭遇したようですね。」
「はい…。」
少しうつむく私たちに少し間を開けて先生が言った。
「残念ですが、結界外への調査は今回が最後です。」
「なぜですか!?」
反射的に聞き返した。完成体が出現し始めた中で対外の調査を打ち切るということなのか。私の質問に今度は青野先生がうつむく。もう一人の神官が先生の様子を見かねて口を開いた。
「バーテックスが侵攻してきます。」
何を言われたのかがわからなかった。バーテックスが侵攻してくる？何かの冗談ではないかとさえ願った。しかし神官は続ける。

「大赦本庁はバーテックスが出現し始めた以上いつかは来るべき時、つまり侵攻が始まると考えていました。あなたたちが比婆山で見た光景、まさにあれが侵攻準備のさなかの状態でした。」
「ということはサジタリウスやカプリコーンのような…。」
　私は話の途中で思わず割って入ってしまったことに気が付き口を閉じる。
「…今日遭遇したのはカプリコーンでしたか。…ともかくあなた方には完成体バーテックスの迎撃を行ってもらいます。」
「迎撃？冗談じゃないですよ！私たちの武器ではあいつらに傷一つ入れられないじゃないですか！」
　伊雪が神官に喰ってかかる。私は彼女を制止した。
「確かに現状の装備では到底撃破にかないません。そこでこれを使います。」
　神官が荷物から取り出したタブレットには５００ｍｌペットボトルほどの太い筒に引き金がついたものとそれに込めるであろうが映っていた。
「何なんですか？これは…。」
　彩葉が質問をした。
「こちらの筒は天戸（あまのと）完成体バーテックスを封印するための武器です。」
「封印？倒す…じゃないのですか？」

「はい。天戸は神樹様の結界である樹海の中で完成体へと打ち込むことで核に作用、ある程度の期間神樹様のお力を干渉させることで完成体すべてを封印できるはずです。」
「ある程度の期間というのは…。」
「持って30年程でしょうか。」
神官は他人事のようにつぶやいた。
「それって、30年後はまた襲撃が始まるということじゃないですか！」
私は口調を荒くして神官を睨みつける。
「美琴さん、今の私たちにできるのはそこまでです。」
黙っていた青野先生までそう口にする。
「先生まで…。」
「30年あれば勇者システムの完成度も高くできます。とにかく人類には時間が必要なのです。」
「来島海峡大橋で迎撃するのはいつなのですか。」
「3日から5日後としか、あと3日でこちらの準備は整いますがあなた方勇者も準備を備えておいてください。」
私たちに世界の命運を乗せて神官は来島海峡記念館を後にした。残された先生と勇者3人は重いその荷にただ立ち尽くしていた。

「身勝手ですよね…。」
先生がぽつりとつぶやいた。
「たとえ身勝手に私たちが巻き込まれているとしても抜け出す方法はないんですよね。」
彼女は首を縦に振った。
夏休み、私たち3人は先日の記憶が片時も離れずに過ごしていた。夏休みの宿題に手をつけようにもそれ以上の重荷を思い出して手がつかない。ちょうどあの日から4日たった日のことだ。3人のスマホに大赦からのメールが送られてきた。来るべき時が来たというのだろう。遠くで風鈴の鳴る音が聞こえる。チリン…チリンと鳴る音からは涼しさではなく不気味さを感じた。
壁のほうから世界が光に包まれていき、私の下をそれが通ると景色は一変していた。赤い大地でも、暑い住宅地でもない色とりどりの植物の根に囲まれた空間…これが神樹様の樹海なのだろう。
「いた、」「琴美さん!」
彩葉、伊雪と合流した。他の人はどこにも見えない。どうやら私たち以外はこの空間に誰もいないようだ。
「見て!」
伊雪が指さした先には樹海から伸びる一本の橋が見えた。その辺りには数十本の柱

が立っている。そして全長１００メートルはある巨大な物体が樹海の外に浮かんでいた。

「レオ…バーテックス…。」

彩葉がつぶやいた。どうやら私たちは大当たりを引いたらしい。

恐怖で足がすくみながらも私たちは祝詞を唱えた。

私たち神世紀２７０年の勇者にとって最期の戦いが始まった。

8話　彼誰時（かれはたれとき）

レオ・バーテックス…完成体の中でも随一を誇る巨体と力を持つと言われる。一説には壁の外を焼き払ったのはレオであるとするものもありおそらく最強のバーテックスである。

天戸（あまのと）を打ち込むのはどの完成体でもよかったのではあるが、よりにもよって侵攻してきたのがレオ・バーテックスとは…大当たりもいいところだ。天戸は中に1発だけ梭（ひ）と呼ばれる先端が円錐になった大きな弾丸が込められている。急造のために一人1発しか弾はない。

「行くよー」

私を先頭に3人の勇者は大橋に飛び込んだ。橋の対岸にその巨体をとらえた。天戸が有効なのはこの橋の上だけ、もし橋を突破されたとすれば封印は不可能。加えて梭を打ち込めなくても神樹様は殺され、それと同時にこの世界も崩壊する。まさに背水の陣と言ったところだ。

突如としてレオ周辺に光が収束しいくつかの球が浮かび上がる。それは私たちに向かって3人へと飛翔した。間一髪盾を呼び出し防いだものの火は盾を焼き灰へと変化

させる。
「この距離でなんて狙撃なの!?」
「あいつ、あの盾を一瞬で焼きやがった…。」
「この距離だと一方的にやられるだけです。琴美さん、伊雪さん、距離を詰めますよ!」
「はい!」「おう!」
間髪入れずに再び火球が飛来する。一方的に攻撃できる距離で決着を付けようというのか。
「撃ち落とします!」
彩葉は素早く銃剣の引き金を引き火球を撃ち落とす。弾丸が火球と衝突するたびに宙に小爆発が起きる。それでも火球はひっきりなしに降り注ぐ。
「まずい!」
「間に合って!」
伊雪が撃ち漏らした火球に向かって私は銃剣を投げた。すんでのところで火球は爆発する。
しかし今度は私が火球に晒された。
「これだからっ!」
伊雪は私の前に割って入り自分の銃剣で火球を防いだ。

「これであいこだな。」
「でも伊雪、武器が…。」
「それはそっちもだろ。」
　まだレオとの距離は遠い。向こうもゆっくりと侵攻してきてるとはいえこのままでは接近するころには私たちが灰になってしまう。彩葉の銃剣も火球に飲まれ、３人の手元には切り札の天戸しかなく丸腰の状態だった。
　その時、バイザーに文字が表示された。
「神花…解放？」
　それに連続して５つの武器が表示された。
「神屋楯比売（かむやたてひめ）、金弓箭（きんきゅうせん）、天ノ逆手（あまのさかて）、大葉刈（おおばかり）、そして生太刀（いくたち）…!?」
「これなんだ!?」
「武器…なのは確かですが…。」
　戸惑っているうちは火球が降りやむなどということはない。私はとっさに神屋楯比売、つまり旋刃盤を呼び出し火球群に向かって投げる。旋刃盤は飛来する火球を切り裂き手元に戻った。
「すごい…。」
「なんだそれ、私たちが前に使ってたやつとは別物じゃない？」

「もしかして、西暦の勇者様達が使ってたオリジナルなんじゃ…？」
「これなら…いけるよ！」
「仕切り直しだね！」
　私は生太刀、つまり刀。伊雪は大葉刈、つまり鎌。彩葉は金弓箭、つまりボウガンをそれぞれ呼び出した。バイザーの表示から呼び出した武器が消える。やはりオリジナル故に1つづつしかないようだ。
「すごい力ですね…。」
　刀を振れば火球は爆発することなく消滅し、鎌を振れば周囲の空ごと火球を切り裂いてみせる。ボウガンは確実に火球を爆発させていた。しばしの後、レオが橋の半分をわたりきったところでようやく接近することができた。
「私が仕掛けます！」
　彩葉は武器を天ノ逆手に持ち替え地面を蹴った。迎撃する火球を殴りつけ突き抜ける。レオの正面で天戸を呼び出し引き金を引いた。しかし放たれた梭をレオの火球が飲み込んだ。
「くっ！失敗…ですか。」
　彩葉は再びボウガンを呼び出し追撃の火球を撃ち落とした。
「ならば！」

次は伊雪がレオの背面へと飛び出した。大葉刈を振り回して火球を切り裂き、天戸を放つ。梭はレオの表皮をとらえたものの突き刺さっただけで貫通しなかった。
「あーもう、貫通しないのかよ！」
あと1発しかない、それも私がラスト…背筋に焦りと緊張が奔る。レオ・バーテックスはすでに橋の3分の2を渡り切っていた。もはや時間もない。
「ねぇ…伊雪、彩葉。」
「何？」「何です？」
降りしきる火球に対処しながらも覚悟を決めた。
「あいつにゼロ距離まで突撃する。」
自分で言ってることが無謀に感じられ苦笑交じりにつぶやいた。
「はぁ？琴美、どうなるかわからないんじゃないの？」
「そうです、ゼロ距離まで寄ったら逃げることは…。」
そうだ、理解はできている。現実離れしすぎているからか、緊張や焦りで可笑しくなっているのか妙に落ち着いていられる。
外す、被貫通、消失。これらすべてが意味するのは神樹様の死、世界の崩壊じゃないか。仮に失敗して返り討ちにされても死ぬのが少し早まるだけだ。ならば一番成功の可能性が高い方法を取るまでだ。

「逃げて…どうするの？神樹様が殺されるのを黙って見るしかないじゃない。」
「っ…。」
「そうだけれども！琴美さん！」
「援護は任せた。もし無事に封印できたらその時は私を思いっきり殴って。」
「琴美！」「琴美さん！」
２人の制止を無視してレオへと大橋を蹴った。生太刀は降り注ぐ火球を切り裂く。しかし数が多すぎる、やはり無謀だったのか。
それでも、無謀だったとしても、たとえ片道だとしてもこの弾丸は届けて見せる。
「一人で抱え込むな！琴美！」
伊雪の叫びとともにワイヤーの斬られた旋刃盤が目の前の火球をすべて切り裂き、上空への道を切り開いた。私はその道をたどって空に舞い上がる。身を翻してレオ・バーテックスを捉えた。新たに放たれた火球も私に届くことはない。彩葉の狙撃のお陰である。
「よし、とりついた！」
レオの正面の球体上になった部分にとりつき、天戸を表皮に突き立て引き金を引いた。
その直後火球が私を直撃し宙へと吹き飛ばされた。

（どうだ!?）

結果から言えばゼロ距離からの射撃は失敗していた。私のバイザーに映し出された天戸内部には弾丸が残っていた。急造品だったからなのか、無理にゼロ距離から射撃に使用したからなのかはわからないが射出に失敗していた。そして爆風によって巻き上げられた私の天戸は目の前で焼失した。

「嘘…。」

レオはもう３０メートルもすれば橋を渡り切る。絶望が私を支配した。神樹様は殺され、この世界は崩壊する。伊雪と彩葉が爆炎に包まれた。私にも火球は迫っている。もはや抵抗もするまい。

（何が思いっきり殴ってだ。格好だけつけて何もできなかったじゃないか。）

後悔、無念、怒り…私のすべてを負の感情が支配しようとしていた。

「生きろ、ただ生きてくれ。」

声が聞こえた気がした。誰の声かはわからない。ただ…とても心強い声だった。

（…まだ、できることがある。）

根拠はない、ただの直感だ。そして迫る火球の隙間に何か光るものを見つけた。

（あれは伊雪が打ち込んだものの貫通しなかった梭か!?）

まだ希望は残っていた。最期の力をふり絞って生太刀を握りしめ、迫る火球を薙ぎ払

う。落下しながら眼で梭を捉え、すぐ近くの表皮に生太刀を突き立てた。右手で突き刺した生太刀を握り、天ノ逆手を左手にのみ呼び出す。そして拳で突き刺さった梭を打ち込んだ。

レオ・バーテックスは足を止めた。

「やった…。」

空から光がさしてレオへと降り注ぐ。少しづつ砂のような粒子へと変化していっている。橋の終わりまで5メートル程だろうか。本当に間一髪であった。

ところがそれで終わりではなかった。突如橋を創っていた植物の根のようなものが一気に灰となり、焼失し始めた。

力が抜けて生太刀を握っていた手は離れ、身体は落下していく。どうやら逃れることはできなさそうだ。

(生きろ…か。)

諦めて身を投げていたが、ふと自分の身体が落下していないことに気がついた。

「ったく、無茶しやがって。こんなんになられちゃ殴ろうにも殴れないじゃないか。」

私は伊雪に受け止められていた。彩葉の姿も見える。

樹海化が解け、私たちは来島海峡大橋に通じていた道に3人は立っていた。大橋は崩落し、その跡にはがれきの山ができている。

「もしかして、樹海で壊れたからなのか？」
「そうじゃないかな…。」
　青野先生が駆け寄ってきた。
「あなたたちがここにいるということは成功したのね…。」
「「はい!!」」
　3人は誇らしげにそう答えた。
　私たちはすぐに病院へと搬送された。火球を浴びていたわけなので当然火傷後が全身に見られた、さらに疲労骨折、打撲、脱臼…どれも軽い物ではあったが複数個所に傷が見られたため回復、経過観察のために入院が必要だと判断された。
「あなた方を大赦本庁所属の教育機関へと移すこととなりました。」
　入院して数日たってから速水神官が訪れ、こう告げた。
　さすがにこの地にいる必要が無くなった勇者を野放しにするほど大赦の手回しは緩くないということか。
「勇者としての役目はまだあるのですか？」
　彩葉が恐る恐る質問した。
「調査任務や対バーテックスの任務はありません。ただ、次の世代へのバトンをつないでほしいのです。貴重な勇者として。」

「バトンを…つなぐ?」
「はい。実際に勇者として戦ったあなたたちならば再び襲来が始まるまでに勇者システムをより良いものにできる。そう本庁は判断しました。」
「なるほど…。」
「それと、いい先生を持ったものですね。」
速水は感心したような様子で呟いた。
「青野先生…ですか?」
「ええ、彼女は本庁を恐れることなくあなたたちの記録を守ったのです。原本を本庁書史部に送ったものと別に保存していたぐらいですからね。」
「そうなんですね…。」

生きろ、ただ生きてくれ…か。
あの時、あの声がなければ今頃この世界は無くなっていたのかもしれない。
日は空高く登った。次は、次は花笑むだろう。

大赦愛媛支部記録

外伝１話　大赦愛媛支部記録　一、

大赦愛媛支部記録

神世紀２６９年年末よりこれを記す。　記録　速水（はやみ）誠一（せいいち）

西暦の奉火祭より約２７０年、我々人類が神樹様の結界の内に身を潜めてから長い年月が過ぎた。しかし最近になって結界の外に天の神の使いである「バーテックス」が現れた。

これを受けた本庁は西暦の時代に表向きには凍結していた勇者システムを改良し、来るべき時に備えよと命令を下した。そこで白羽の矢が立ったのがこの愛媛支部である。

白羽の矢が立った以上は何もしないという訳には行かない。勇者システムを扱うのは無垢な少女でなければならない。選ばれたのは松尾琴美、八木伊雪、須田彩葉の三人。須田以外は愛媛県外在住であり、他の支部や本庁を通じて集めてもらうことになった。彼女らのお目付け役の教員も決まった。名前は青野…と言っていたかな。

記録者である私の記録を忘れていた。私は速水誠一、今回の「勇者」についての記録統括を拝名した神官である。

勇者システムについてをここから記録する。

勇者システムとは神様の力を人間に投影するいわば降霊術のようなものだ。私も実際に眼にしたことはないが、西暦の時代には勇者システムを駆使し、天の神からこの神樹様をお守りになった勇者様がいることから強大な力を投影できたのだと推察する。

先に述べたように西暦の終わり、そして神世紀のはじめにこの勇者システムは表面上は凍結されていた。しかし実際は秘密裏に研究が進められており、この緊急時において正式に凍結を解除された。この研究自体も何をしていたのかはわからない。

とにかく、今私に課されている任務は勇者システム…、そうだな、ここでは次世代型勇者システムと呼称するものとしよう。その次世代型を実戦で使っても十分な性能を引き出せるものにすることである。

西暦の記録から武器を選定した。刀、手甲、旋刃盤、ボウガン、それと鎌である。鎌だけは本庁の上里様から直接のご選定をいただいた武器である。個人としてはなぜ鎌を選定されたのかは謎であるが立場上疑問の声をあげることはしない。

この武器選定についてであるが、使用データを取ったのちの変更はあり得ることを明記する。これは事態が西暦と異なっている可能性があることと、使用環境が異なるからだ。

西暦の時代ではバーテックスに明確な侵攻意志があったために神樹様による結界内

の樹海化と呼ばれる防御結界が展開され、勇者様方はその樹海で戦われていたという記録があった。しかし今回の場合は現在は明確な侵攻意志は見られない。

そのため、同時に結界外の調査も行われることとなった。現在結界外の観測は羽衣（はごろも）と呼ばれる耐熱服を纏った神官が行っているが、バーテックスの出現により非常に危険なものである。すでに他の支部では神官が襲われたという報告が挙がっているほどである。それを代替させるということだろうか。

加えて次世代型の試験型とな今回のシステムでは神樹様のエネルギー負担を軽減させるためにシステムの統一化が行われることとなった。簡潔にいうならば勇者システムの量産化である。さらに試験型を簡素なものにして誰にでも扱えるものに統一しておけば、いざ発展させる時にあれこれ付け加えるだけでよいからだ。

さて…３月から実際に次世代型勇者システムの運用が始まるわけではあるが、私にも何が起こるのかは予測できない。しかし、バーテックスが現れた以上は行動しなければいけないのだ。

神世紀２７０年２月

外伝２話　大赦愛媛支部記録　二、

大赦愛媛支部記録　　記録　速水（はやみ）　誠一（せいいち）

神世紀２７０年３月、一度目の勇者の派遣が行われた。

私個人としては早すぎる初陣だったとは思う。しかし別の支部の神官がバーテックスに喰われたのだ。これ以上神官に犠牲を出さないために本庁は調査を決行させた。これで神官からの犠牲者はいなくなるだろう。

勇者の結界外派遣はおおむね成功だった。

次世代型勇者システムは正常に作動。バーテックスの攻撃を受けながらも軽傷に押さえることもできていた。武器５種のバーテックスに対する効力も確認できた。

ひとまず次世代型勇者システムの初期段階は達成している。しかし予想外のデータが現れた。

１つ目は耐熱性能の不足である。大気温度は神官が装着していた羽衣を参考に設定されていたが地面と擦れたときなどに許容熱範囲を超えおり、帰還した勇者３名に火傷が見られた。

２つ目は汎用システムの限界である。初期の想定では基礎としての複製を前提とし

て設計されていたために個々の戦闘のやり方に大きな差があり、各種許容範囲を超えていた。

これらは改善点であり早急に耐熱性の向上と使用者にあわせた最適化を行う必要があるとされ、現在技術班が対応に当たっている。

また同時に試験を行った結界外物質保管用装備「羅摩」の試験結果はさんざんであった。こちらの耐熱性も結界すぐ外の気温を基準に作られたために実際に土壌を採取すると羅摩が融解する自体に陥った。しかし今回の調査で来島大橋から少し離れた地表温度を計測できたためこの問題は解決するものと思われる。

また今回の改良に当たって装束にレーダーを実装する。西暦の時代にも端末に樹海内の図を表示し、互いの位置を確認できる機能が勇者システムに組み込まれていた。しかし次世代型では実践投入時期が先に述べた事件の影響で前倒しされたことから実装が間に合わなかったのだ。今回の調査が結界からあまり離れる物ではなかったために一大事にはならなかったが本庁には支部の現場を思いやるという気持ちはないのだろうか。

しかし上記に記した改善点や調査記録などは確かに貴重な物であり、一概に本庁の決断を批判をすることはできない。

現在これらのデータによって次回の派遣先が検討されている。

西暦の時代、結界の外にあったとされる大社、大赦ではない。そこには神樹様の一部となった神様が祀られていたものがあったという。本庁からの通達では最終的にはこの大社に勇者を派遣し、この状況を打開する何かを見出す方針であるという。

しかしこの愛媛から一番近い大社と言っても島根県の出雲大社か福岡県の高良大社である。いきなり長距離の派遣はいくら勇者であっても困難を極めるだろう。やはり段階を踏み、積み重ねていくしかないのだろう。

外伝３話　大赦愛媛支部記録　三、

大赦愛媛支部記録　　記録　速水（はやみ）　誠一（せいいち）

ゴールデンウイーク、それは旧世紀から続く祝日が連続した連休のことであり、人々はみな旅行に出かけたり、友人と集まったり、とにかく好きなことに打ち込む日々である。

去年の支部内でもゴルフに出かけるもの、他県に遊びに行くものなど多くの人が連休を享受していた。しかし今年は一切そのような光景は見られない。

勇者による結界外調査がゴールデンウイーク初日に決行されたのだ。前回の記録から改善を施した次世代型勇者システムは前回の比にならない距離の遠征の中でも勇者自身を保護する役割を完遂していた。

また前回耐熱性に難がありサンプルの回収に失敗した羅摩であるが改良を加えた結果今回は成功した。ここで得られたサンプルは本庁に送られ、あるものの開発に利用されるのだという。詳細は聞いていないが、どうやら神樹様の力を外の大地へと投影して勇者以外の人類でも結界の外で生存できるようにするらしい。

しかし問題点も発生していた。勇者の武器が調査に適していない可能性が高いので

ある。そこで武器システムに銃剣と盾を追加した。持ち替えの動作なく射撃と斬撃が繰り出せる銃剣ならば結界外のバーテックスの群れにも対抗できるであろうし、盾は旋刃盤とは違い当然守るために設計されているためサンプル採集の際に役立つと期待されての採用である。

この二種の武器は理論上すべての状況の敵に対応できるため、次世代型勇者システムの初期からある複製、量産の際には過去5種の武器は削除されて銃剣と盾のみが採用される可能性が高い推測される。

ところでー、

ここまで書いたところで部屋の扉が開き一人の神官が入ってきた。大赦の仮面を付けているがおおよそ誰かは予測が付く。

「速水神官で間違いないですよね。」

「ああ、青野神官…ですね、日々の管理役職ご苦労です。」

「今日はその管理役職についての話で来ました。」

「ほう。」

彼女はいわば勇者3名のお目付け役、直接あったことはなかったか。

「速水神官は本当に出雲までの派遣を決行させるのですか?」

出雲大社…神樹様の一部になられたと言われる神様が西暦の時代に祀られていた場所。過去の暦では11月、神有月に日本全国の神様が集まると言われていた場所。そして本庁が何かこの状況を打破できるものがあると踏んでいる場所…。

「なにか、異議があるのですか。」

「はい。現在の3名では出雲への遠征はできません。」

「…なるほど。一番近くで勇者を見ている青野神官の言うことはもっともですね。もちろんいきなり出雲へは行かせません。私も本庁の神官ではないのでね。彼らは支部のことだと無茶を言い出す。…失礼、つい愚痴を。」

「いえ。速水神官は本庁の無理な指示をそのまま受け入れる人とは思ってませんので。」

ずいぶん信頼されているようだ。しかし何も本庁への反抗心のみがこの決断をさせているのではない。

「あまり私を買いかぶらないほうがいい。君ほど勇者に肩入れしてる立場ではない。」

「そう…ですね。確認したかったことはできたので私はこれで失礼します。」

「大変な役目ですが頑張ってください。」

静まった部屋で私は支部の計画に眼を向ける。比婆山…。神々の母の御陵ありし土地。

私も本庁に反感を抱きながら、何一つ変わらないのかもしれない。

外伝４話　大赦愛媛支部記録　四、

大赦愛媛支部記録　　記録　速水（はやみ）　誠一（せいいち）

比婆山の調査が終わった。大赦支部の“想定通り”完成体バーテックスの出現が確認された。先に想定通りと述べたのは巫女様が提示された神託に基づく想定が的中したということである。過去の尾道への調査はその後の調査の布石とするために神官内の会議によって決定されたものであり、陥没地が観測されたのは偶然であった。しかし、比婆山については完成体が出現するという神託と西暦時代に残されていた伝説を基に決定されたものである。もし西暦の時代の人間がこの文章に目を通すことになれば「伝説をあてにするなど気でも狂っているのではないか」と思われるかもしれない。しかし、神樹様が実在する現在においては伝説であっても通常の記録となんら信頼性は変わらないのである。現に記録では比婆山地点において完成体は誕生した。

ここまではこの愛媛支部が出雲調査を急ぐ本庁の命令を無視した独自の調査であったが、さすがに完成体が観測されたとなれば本支部としての見解も出雲への調査となる。また、本庁からつい先ほど送られてきた資料に気になるものが混じっていた。

「バーテックス封印についての計画」

かみ砕いて説明するならば神樹様の御力をバーテックス内部にある核へと干渉させ、その活動を低減ないし停止させるという計画である。それに関連しての干渉させるための装置を内部に打ち込むための武器の三面図と来島海峡大橋の防衛ラインとしての改修案が同封されていた。しかしなんだ、これじゃまるで攻め込まれることが前提じゃないか。確かに完成体が確認された以上西暦と同じように襲来が行われる可能性は高いが…。

――以下は勇者３名に接触した後の記録である。

特別な用事はなかった。出雲への遠征指示も青野神官を通して行ってもよかった。しかしこう書くのはどうかとは思うが、私の興味であったのだ。もちろん建前としては責任者であるからと立ててはいたものの、実際それほど支障をきたすはずはない。

そうとは言ったが、記録だけではわからなかった物が少しわかった気はする。数分の接触ではあったが身分不明の神官が現れたときの３人の動きから互いを信頼しているようであった。これは私の主観ではあるが、彼女らならば出雲への調査も無事成功させてくれることだろう。ただし完成体バーテックスとの接触がないとは言い切れない。そこで完成体と遭遇した際には全力で逃げること。という条件を明確に付けよう。あとで本庁から叱られるのは私だけでいい。私の立場のためだけのために３人の少女を屠るわけにはいかない。一つ気にかかることは本庁から出雲以降の指示がないことで

ある。まさか…本庁はこの支部が持ってない情報をすでにつかんでいるというのだろうか。

外伝５話　大赦愛媛支部記録　五、

大赦愛媛支部記録　　記録　速水（はやみ）　誠一（せいいち）

時間がない、今回の記録は手短に行う。すでに私が記録を付けている机には書類の山が積みあがっているし、廊下では職員が頻繁に行き来しているためだ。

結論から書くとバーテックスによる侵攻が始まる。そこで大赦本庁、支部ともに問答無用で前回述べたバーテックス封印計画を実行しなくてはならなくなった。

当然作戦実行は勇者3名、作戦本部は愛媛支部である。干渉体を打ち込むには完成体バーテックスに接近する必要があり、勇者以外の実行は不可能。さらに干渉体、天戸（あまのと）と命名された武器は急造のため1人につき1発しか用意できなかった。そこに加えて天戸の有効範囲は神的（しんてき）防衛施設として改修中の来島海峡大橋の上でしか作用しない。

もはや本庁が先に状況を握っていたかどうかはどうでもよく、万一の防衛計画がなければ今回はどうしようもなかったと思う。そうなればまだ解明の進んでいない西暦の精霊システムを無理にでも使用するか、奉火祭を決行することとなっていた可能性が高い。しかし奉火祭を行ったところでバーテックスの襲来が止まる確証もないし、精霊システムを採用したところで撃破できるかどうかも不明である。

神託を基にした予測では明後日かその次の日に先方の襲来があるはずだ。それまでになんとしてでも間に合わせなければ。

――以下襲来当日の記録

「来島海峡大橋改修計画、現在完成率８０％…まだ動くかどうか…」

「樹海化確認装置、作動確認まだです！」

「天戸転送プロセス構築、勇者側での受信可能です」

ここは愛媛支部の大部屋である。雑に配置された机には書類の山がそびえ立ち、その合間を縫ってケーブルが張り巡らされている。十数名の神官がパソコン相手に数値やプログラムを入力し、合間に声をあげている。

「８割完成していれば稼働する。安全装置類を省略、安全装置を見ていて世界が護れるか！樹海化確認はテストを省略、以下の項目へ！天戸転送は間に合ったか…これで一応の準備はできたな……」

私は作戦本部長として各部署からの報告をまとめていた。あとは結界直上でバーテックスの動向を観る観測班からの通報によって決戦が始まる。

「観測班からの通達入りました！完成体バーテックス視認。画像来ました。照合中…これは…！」

観測班からの画像を照合させていた神官の言葉が詰まった。

「どうした！どのバーテックスが来たのか!?」
「レオ……バーテックスです。確認されたのはレオ・バーテックスです！」
（よりにもよってレオか……）
　作戦本部に動揺が奔った。しかし来てしまった物は仕方がない。
「現在時刻をもって作戦開始、各種システム稼働。勇者３名に樹海化の通達を」
　私の一声で決戦の火蓋が切られた。
「樹海化確認！カウント……１０……９……」
「来島海峡大橋、一部システムがシステムエラー！」
「今動く部分からシステムの再稼働の通信を送れ！」
「８……７……６……５……」
「システム稼働成功、しかし遅れで樹海化数秒後に稼働です！」
「数秒なら大丈夫だ間に合う！」
「４……３……２……１……」
　作戦本部が光に包まれていく。やることはやった。あとは３人の勇者に世界の命運を委ねよう。

外伝最終話　大赦愛媛支部記録　六、

大赦愛媛支部記録　　記録　速水（はやみ）　誠一（せいいち）

決戦は終わった。勇者3名は生存。被害は来島海峡大橋崩落のみと人的被害が出なかったのは本当に喜ばしいことである。来島海峡大橋の崩落事故は老朽化による事故として公表された。実際には世界の命運を賭けて少女3人が戦ったということを私たちは忘れてはならない。「それなのに」だ、本庁は次世代型勇者システムのデータのみを残してそれ以外はすべて抹消せよとの命令が出た。私は内心反対しながらも支部のサーバーの中でどれが勇者システムに関連するデータで、どれが関連しないものなのかを選別していた。もちろん防衛ラインとして稼働させた来島海峡大橋の運用データや次世代型勇者システム本体のデータは残す。しかしだ、彼女ら3人の記録は抹消しなくてはならない。私はどうしてもすべてのデータが必要に思える。確かに本庁が言わんとすることも理解できないわけではない。勇者というものが大赦外に出たときにこの社会に与える影響は計り知れない。そういう点では本庁は非常に合理的な判断をしているのだ。それでも世界を繋いだ勇者であることに違いはない。私は2つの狭間で葛藤していた。

そんな時だ。あるフォルダーが私の眼に止まった。作成者はうまく偽装されていて不明だ。一通り目を通した。これは大赦支部記録の原本じゃないか。原本なら本庁に送られて検閲済のものしか残っていないはずだが…。それも複製された痕跡もある。今これを消したところでサーバー外のどこかで保存されることになる。誰だ…。心当たりがある人物は…一人しかいない。

「青野か…。」

不意に呟いていた。そうか、それが彼女の勇者との向き合い方であったということか。私は本庁に反感を持ちながらも大赦の神官としてこの役目をになっていた。一方で彼女は勇者の神官としてこの役目に就いていたのか。彼女の不鮮明だった姿勢がようやく理解できた気がする。ならば私もこの件についての考えがまとめよう。私は勇者達に付く。勇者自体の記録もシステムのデータにもぐりこませれば問題ない。

数日間でデータの選別が終わった。といっても3名の勇者の記録は何一つ抹消するリストには入れておらず、むしろそれらを残すための理由をあれやこれやと考えていた時間の方が長かった。ただしあの原本だけはどうしても残すための理由が見つからなかった。そこでコピーをして保存することにした。紙ならばたとえサーバー内をくまなく探しても見つかることはない。そして今日は3名の勇者に最後の報告をする日でもある。私は必ず伝える。

「いい先生を持ったものだ。」と。

大赦愛媛支部記録　ー終巻